

八ヶ岳通信



文化財課-

平成11年度の注目の発掘成果から



密集する住居跡



大型のヒスイ垂飾

今年度圃場整備事業や住宅造成等に伴う発掘調査が、市内の各所において行われています。この内で注目すべき遺物や遺構が発見された中ッ原遺跡の概要について紹介します。

中ッ原遺跡の概要

中ッ原遺跡は茅野市湖東山口地区に位置します。古くより縄文時代の大遺跡として知られており、昭和4年には伏見宮による発掘調査が行われ、縄文土器が発見されています。平成4年県営圃場整備事業に伴い発掘調査が行われ、縄文時代竪穴式住居址59軒等が検出され、頭部と腕部を欠損する高さ16.8cmの大型土偶も出土しています。

今回の調査は基盤整備促進事業中村地区に伴う記録保存を前提とした調査で、平成4年に調査された範囲の西側に延びる尾根状台地の先端部を対象に行われ、縄文時代の竪穴住居址が17軒、土坑が約700基検出されています。

縄文時代の集落は大きく2群より成り立つようで、台地の先端部には縄文時代中期後半から後期前半までの住居址が、台地の中央部を取り囲むように作られ、全体形が環状となっています。これらの住居址は柱穴がぐるりと取り囲む柱構造が特徴的なものです。住居址に囲まれた中央部の広場には東西方向を向く、長楕円形の墓

穴と思われる土坑が3基並ぶように発見され、その内の一つの西側穴底に涙型の小さなヒスイ垂れ飾りが出土しました。その状態は、死者の首に垂れ飾りを掛け埋葬した状況を示しているものでしょうか。

台地中央部では集落の全体の把握には至ってはいませんが、縄文中期前半の竪穴住居址5軒が帶状に並んで検出され、この住居址群に取り囲まれる位置に、多くの土坑が検出されています。土坑にはさまざまなものが見られ、太い柱を立てた深い穴や、副葬品と思われる玉類を出土する楕円形の墓穴等があります。この他に縄文後期に属する柱穴がぐるりと取り囲む住居址も1軒検出され、この他に柱穴状の穴が多数検出されていますので、数棟の住居址が存在したものと考えられます。

特筆する遺物ではヒスイ製の垂飾りが4点出土しています。これらの内最も大きなものは墓穴と思われる土坑より出土しており、この形は長さ9.86cm、幅2.68cm、厚さ1.69cm、重量69gのやや鰯節形を呈し、色は白色がかる緑色をしています。玉の中央より端に寄った位置に孔径1.71cmの孔が垂直に穿たれており、ヒスイのような硬い石にどのような方法で孔を開けたのか興味深いものがあります。

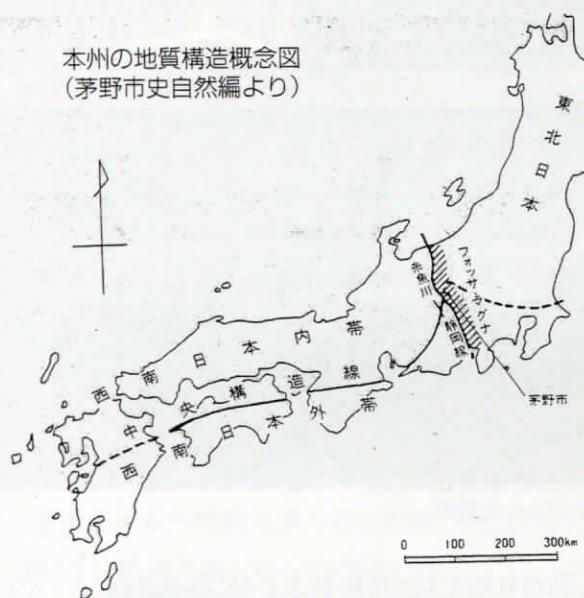
本年度調査区の東側を来年度調査予定ですので、本遺跡の全容が把握されるものと期待されています。

断層～発見 動く大地～

「断層」は、岩体が強い力によって破壊されたときにできた割れ目沿いに両側の岩盤がずれて動いた状態をさします。

西南日本を2つに分ける中央構造線は、日本列島ができるときにできた断層で、現在も動いている活断層です。

本州の地質構造概念図
(茅野市史自然編より)



日本の中南部をほぼ南北に横切る大断層を糸魚川一静岡構造線と呼びます。これも活断層でフォッサマグナ(大地溝帯)の西縁とされています。

日本列島の形成にかかわる中央構造線を、糸魚川一静岡構造線が切っている場所が杖突峠付近であるといわれています。

これらの断層に付随すると思われる断層はいくつかわかっているのですが、中央構造線や糸魚川一静岡構造線だと断定できるはっきりとした断層は諏訪地方ではまだ見つかっていません。

それは、諏訪湖周辺の火山が噴火し、その噴出物(塩嶺累層)がそれを覆い、わからなくなっているのです。

CHINO JAPAN好評のうちに終わる

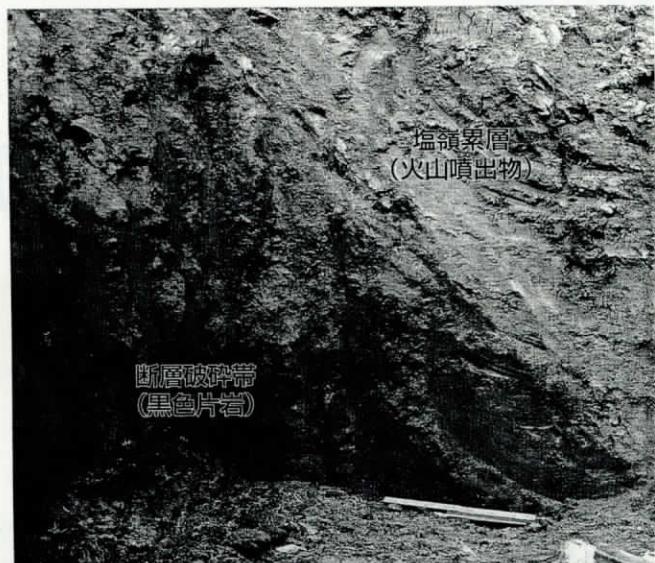
7月24日～10月2日まで、姉妹都市アメリカコロラド州ロンゴンモント市の博物館で、茅野市の紹介をする「CHINO JAPAN」を開催しました。

茅野市の自然や歴史、生活などを写真パネル等で紹介とともに、国宝土偶のレプリカや民具、なども展示しました。その他当館の職員による機織の実演、煎茶のサービスも行いました。会場に入りきれないほど人が集まり、ロングモント市の人々の日本文化への興味のほどを伺うことができました。

最近、安国寺区の山手に造成工事された場所では、見事な断層破碎帯を見るることができます。破碎帶は黒色片岩が破碎され、青黒い粘土や、細かい角礫岩(角ばった岩)とでなっています。青黒い粘土は、ねばねばしていて、断層に伴い破碎され粘土化したもの(断層粘土)と考えられます。角礫の一つ一つを見ると、つるつるに磨かれた面があります。これは、硬い岩石がずれたときの摩擦によって磨かれた状態(鏡はだ)と思われます。

今回見つかったこの断層破碎帯が、どういったものであるのか、また、黒色片岩の破碎帯の幅や、破碎帯と塩嶺累層との断層関係についてもまだよくわかりませんが、中央構造線および糸魚川一静岡構造線の交差する地点にかかわるものではないかとも推測されます。今後の調査が待たれます。

※なお、この断層が見られる場所は私有地のため、一般の人は立ち入ることができません。



今回の開催が、両市の友好親善の一助となったのではないかでしょうか。

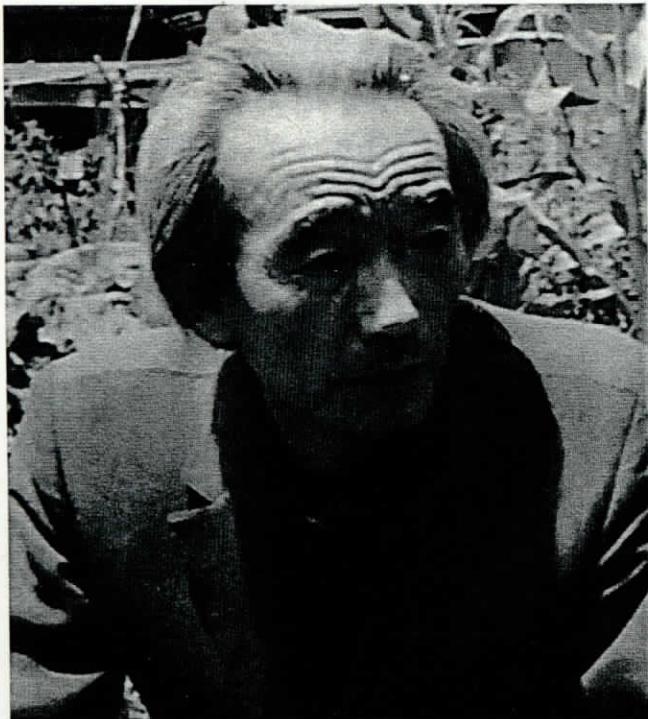


ロングモント市民でにぎわう「CHINO JAPAN」

茅野市美術館開館20周年記念

一ふるさとの祭りを描いた洋画家—五味保展

'99 7月27日(火)~8月18日(水)



五味 保 (ごみ たもつ)

茅野市美術館では、平成11年度の企画展は茅野市横内生まれの洋画家「五味 保展」を、7月27日(火)から8月18日(水)まで行いました。

五味 保・1909年-1981年

1909年(明治42年)12月23日に旧永明村横内に生まれ1922年(大正11年)永明尋常小学校高等科に進み、その頃従兄の加藤正信より岸田劉生の『麗子像』の図版を見せられ強烈な印象を受けている。五味保画集の自身による回想部分には次のように記されている。「人の心を打つこの“秘密”は一体何であろうか。絵画とはかくもすばらしいものなのか。洋画家になりたいー私はその時、固く決意した。」大正13年には地元の小川写真館に弟子入りしている。当時の世相もあり画家になることが難しく、なかなか理解されない時代にあって、写真なら絵画の勉強にもなるだろう、との思いからであったそうだ。

その後、東京オリエンタル写真学校で学び、1932年(昭和7年)23歳で諏訪市の片倉館前に五味写真場を開業している。そこは、いつも画学生や絵描きのたまり場であったようだ。当時、諏訪中教諭の嶋口信一らと『羊壺会』を結成し、展覧会を開いている。また、原伊市の油彩画と五味保の写真による二人展も開催しており、法政大学教授であった原田勇や林田不二生などが執筆した新聞の展覧会評などが残されている。昭和11年、12年ごろには画家の野口弥太郎、彫刻の清水多嘉示、美術評論家の

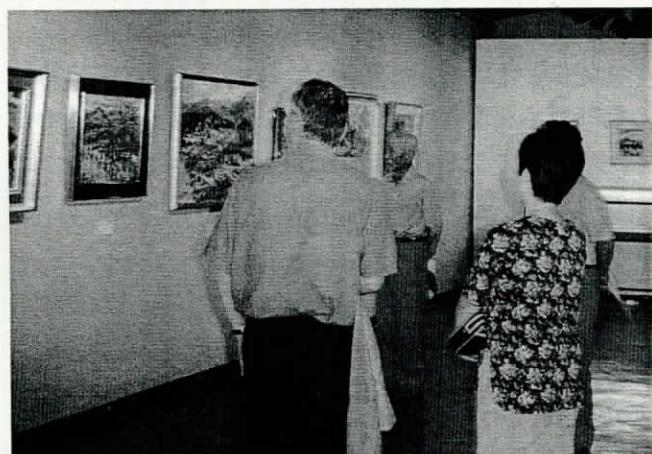
大島隆一などが写真場へ遊びにきていたらしい。そして五味保の画家としての人生の中で最も重要な人物である東郷青児とは、宮坂彦衛を通じて昭和12年に初めて出会っている。

また、交友関係は岩波書店の岩波茂雄、俳人の石田波郷、島崎藤村の次男である洋画家の島崎鶴二と広がりをみせている。戦時中も絵筆を離すことはなかったが食糧難であり、自分の思うように制作は出来なかった。戦後の昭和21年、写真館を開く傍ら必至に絵に打ち込んでいる五味保の姿がみられた。

1955年(昭和30年)には東郷青児らに依頼し諏訪市美術館での二科展開催に尽力している。その後も制作を続け、1966年(昭和41年)には第51回二科展に初出品した「社の絵馬」が特選を受賞している。1968年(昭和43年)第53回二科展に「日本の民芸」を出品し会友に推挙。55回展の開催された1970年(昭和45年)に「諏訪湖の朝」で会員となっている。

生涯にわたり二科展を中心に作品を発表し、昭和56年5月23日、72歳で亡くなるまで制作を続けた。

この年の3月開催された二科春季展に出品した「諏訪のヤツカ(冬の諏訪湖)」が絶作となっている。



展示会場撮影景

ご遺族の方々のご協力により、70点以上の作品をお借りすることができ、セイコーホームズからは、「社の絵馬」(1966年作第51回二科展特選)をまた、長野日報社からは、「信濃の祭・春」(1978年作第63回二科展)と共に、お借りすることができました。数多くの作品を、市民の方々に見ていただき、五味保と親交のあった方々も県内・県外をとわざ来館され、作品を見ながら思い出話に花を咲かせて行かれました。

順調に進む尖石考古館建設

新しい考古館は平成12年7月20日開館

一昨年の夏から始まった新尖石考古館の建築工事が、いよいよ大詰めとなっていました。



新尖石考古館の外観

考古館の建設工事は、12月一杯でほぼ終了し、そのあと展示を含めた内装工事を行った後、平成12年7月20日(海の日)開館予定となっています。

神長守矢史料館

守矢文書にみる「贈答」の歴史

中世の守矢文書は、諏訪郡内を語る史料より、郡外の様子を知る上で重要な史料が多くあります。

文安3年(1446)から延徳2年(1490)までの諏訪神社の祭礼である花会・五月会・御射山祭を勤める頭役を行う郷村を記した『御符札ノ古書』には、信濃国各地の豪族の名前や、頭役で納めた物、金額、それから動向までも記されています。

『御符札ノ古書』で納められている物の中に、鷹と馬があります。武士の社会の中では鷹と馬は贈答品の主要品目であり、いろいろな文書に見ることができます。天文17年(1548)と考えられる守矢頼真書状案では、大祝と鷹と馬の配分について神長と争ったことがわかります。武田信玄の支配下に入る前は、厳密に大祝の取る馬と鷹が決められていましたが、武田支配下に入り大祝の力が弱まり、神長などが台頭してくると、大祝の元に入る贈答品が少なくなったようです。神長に馬を贈っている人々を見ていると、諏訪郡内では有賀・福島・小坂・矢崎など有力な人々が名を連ねています。鷹については、主君で

新尖石考古館は、茅野市で所蔵する多くの資料や、現在行われている遺跡の発掘調査で出土する資料を随時展示したりする他、縄文時代研究のセンターとして小学生や市民、研究者が気軽に訪れ、考古学に親しめる場として機能していくように考えられています。

今回の尖石考古館建設に並行し、与助尾根地区を中心とした尖石遺跡の史跡整備も進んでいます。今年度は与助尾根地区にあった古い復元家屋4棟の取り壊しと周辺に繁茂するニセアカシアの伐採、考古館から与助尾根、尖石、青少年自然の森を散策する園路工事が行われています。

今後、開館までに新しい復元家屋を6棟建設し、さらにコナラやクリなどの植栽工事も行い、縄文の森の復元を行います。

なお、考古館の事務は1月から青少年自然の森から新尖石考古館に移転しました。

電話番号(0266)76-2270、FAX番号(0266)76-2700は今まで通りです。

ある上杉氏を追い、実質的な越後守護となった長尾為景から大永4年(1524)に鷹が送られています。また、実際に長尾為景が送ったときの書状も守矢文書の中に残されています。守矢頼真書状案の中に、長尾為景からの鷹は、当時の諏方家の惣領である頼満の要求で京都在住の道正に贈られ、他は高遠頼継に贈られているところが面白いところです。

高遠頼継は諏方氏の一族と言われ、現在の高遠町を中心に勢力をもっていた豪族です。高遠氏とは頼継の祖父である継宗の代から争い、天文11年には信玄と結び諏方氏を滅ぼしましたが、大永年間の頃には関係が良好であったことがうかがえます。

このような贈答品のやりとりを通じて、中世の武士たちは同盟関係の交渉を行ったり、頼み事をしたりしていました。その後、江戸時代を通して現在にいたるまで、御中元や御歳暮といったかたちでこのような贈答行為は続いているのです。

茅野市の博物館・文化財課だより **八ヶ岳通信 No.18**

発行年月日 平成12年3月1日

編集・発行 茅野市神長官守矢史料館 〒391-0013	茅野市宮川389番地の1 TEL.(0266) 73-7567
茅野市八ヶ岳総合博物館 〒391-0213	茅野市豊平6983番地 TEL.(0266) 73-0300
茅野市美術館 〒391-0011	茅野市玉川500番地 TEL.(0266) 73-5440
文化財課 〒391-8501	茅野市塚原2丁目6番1号 TEL.(0266) 72-2101
茅野市尖石考古館 〒391-0213	茅野市豊平4734-132 TEL.(0266) 76-2270